

北海道東部のトビニタイ文化および擦文文化の竪穴住居での 木材利用にみられる樹種選択

環境資源学専攻 森林資源科学講座 樹木生物学 花里 貴志

1. 目的

遺跡から出土した木質遺物は、年代の測定や形状の記録が行われるのみで、樹種同定調査は実施されない場合が少なくない。様々な地域、年代の木質埋蔵文化財の樹種について情報を増やしていくことで、古代の人々がどの時代、どの地域で、どのような加工法で、どのような樹種を選んで利用していたかを明らかにできる。北海道では、特異的な文化が入り混じっている約 1000 年前の道東部の遺跡における樹種同定調査例が乏しい。そこで木質埋蔵文化財の樹種同定に関する情報蓄積のため、道東部におけるトビニタイ文化および擦文文化の竪穴住居址から出土した木質遺物の樹種同定を行い、既往の調査例を含め、それらを集成する。

2. 材料及び方法

釧路市幣舞 2 遺跡 (12 世紀; 擦文文化), 標津町伊茶仁カリカリウス遺跡 (11 世紀; トビニタイ文化), 同当幌川左岸竪穴群遺跡 (12 世紀; トビニタイ文化), 斜里町須藤遺跡 (12 世紀; トビニタイ文化) の竪穴住居址から出土した木質遺物 (炭化材) をそれぞれ 95 点, 55 点, 28 点, 6 点分析した。炭化材より小片を採取し, 走査電子顕微鏡で解剖学的特徴を観察・写真撮影し, 木材組織に関する既往の文献やウェブ上の木材識別データベースを参照し, 樹種の同定をした。

3. 結果と考察

幣舞 2 遺跡では, 8 植物群 (種) が同定された。全試料中 81% (77/95) が広葉樹であり, その中でもコナラ節が 44% (42/95), ハリギリが 23% (22/95) を占めた。同定された針葉樹材は全てトドマツであり, 全体の 19% (18/95) を占めた。当遺跡周辺では当時, コナラ節やハリギリなどの落葉広葉樹とトドマツを主とする針葉樹との混交林が存在していたと考えられる。伊茶仁カリカリウス遺跡では 7 植物群 (種) が同定され, 28 点全てが広葉樹であった。コナラ節が 35% (19/55), ハンノキ属が 29% (16/55), トネリコ属が 18% (10/55) を占めた。当幌川左岸竪穴群遺跡では 8 植物群 (種) が同定された。ほぼ全て (27/28) が広葉樹であり, トネリコ属が 43% (12/28), コナラ節が 25% (7/28) を占め, 針葉樹材は 1 点のみであった。これらの遺跡周辺ではハンノキ属やトネリコ属, ヤナギ属などが構成する水辺林が存在していたと考えられる。須藤遺跡では 6 点中 4 植物群 (種) が同定され, 全てが広葉樹であった。コナラ節が 50% (3/6) を占め, 他にハンノキ属やイヌエンジュ等が見られた。また, 北海道東部の竪穴住居址から出土した木質遺物の樹種同定結果を, 既往の知見に加味し集成すると, トドマツ等の針葉樹は, オホーツク文化で建築部材として多く利用されていた反面, 明らかにトビニタイ文化と擦文文化でその利用が減少していることがわかった。代わりにトビニタイ文化ではコナラ節やトネリコ属, 擦文文化では北海道東部全域でコナラ節が多用されている。トドマツ材は木理が通直で割裂性が高く, 加工が容易であるが, 強度性能と耐久性は低い。一方ナラ類の木材は高密度で強度が高いが, 加工性は不良である。遺跡周辺に生育していた樹木を無作為に使っていたのではなく, 長く活用する住居の部材だからこそ, 強度性能を重要視してナラ類を選択したのではないかと推察する。ただし, トビニタイ文化における木質遺物の樹種に関する知見は本研究のほかには報告例がないため, これがトビニタイ文化に共通する木材利用の嗜好なのかについては, 今後の樹種同定データの蓄積を必要とする。